Ⅰ　『研究紀要』第 28 巻の刊行によせて

「能力」という言葉がない

教育研究所所長　佐伯　胖

本巻の研究員の報告を読んで、どこか「普通でないこと」に気づかれましたでしょうか。それは、「能力」という言葉がほとんど出てこないということです。教育にかかわる文書といえば、普通なら「能力の育成」とか「能力の獲得」とかの文言が頻出するのが当たり前ではないでしょうか。ところが本巻の研究報告で、「能力」という言葉が使われている唯一の文例は、「当時の私は、私が思う能力なるものを獲得させようと関わり」（福島研究員）の一文だけです。

「教育」といえば、教師は子どもの「能力の育成」を図り、子どもは「しかるべき能力の獲得」をめざして学習活動を進めていくというのが当たり前であって、「教育」から「能力の育成・獲得」を無くしてしまったら何が残るのかと疑問に思われるかも知れません。

実は、出現頻度が非常に高いのは「思い」という言葉です。これは 1 論文あたり平均 51 回（最大 71 回）出てきます。子どもの「思い」というのは、子どもの言葉や行動から「客観的に」観察できる「行動」ではありません。当然、教師の主観的判断で「読み取る」ことです。むしろ、「感じ取る」ことでしょう。実際、「感じ（る、た、て、…）」の出現頻度は 1 論文当たり平均 36 回（最大 63 回）です。

つまり、研究員が教師として心懸けていることは、子どもの「能力」を高めることではなく、むしろ一人ひとりの子どもの「思い」を「感じ取る」ことなのです。

ここには、どんな子どもも人間として「よく生きたい」、「よくありたい」という願いや訴えがあるはずだという前提に立って、子どもの「思い」や「願い」を言葉として聴き取るか、言葉以外の振る舞い、表情、などから「感じ取る」かを試み、そこから、子ども同士の関わり、子どもとの関わり（関係）について考えていこうということです。ちなみに、「関わ（り、る、…）／かかわ（り、る、…）」で検索すると、1 論文当たり平均 18 回（最大 55 回）検出されます。また、「関係」は 1 論文あたり平均 12 回（最大 30 回）検出されます。

以上のことから、当研究所での研究員の研究についての「普通でない」特徴がおわかりいただけたのではないでしょうか。